

「よちよち、宇宙へ行く。」／

間もなく、よちよちがロケットで宇宙に向かって発射されます。

よちよち：「いくおー」

そろそろカウントダウンが始まりますが。どうしてこんなことになったかという、事の発端は……。

よちよちがおじさんに呼ばれて、とても大きい会社のエライ人といっしょにご飯を食べたのがきっかけでした。

ちなみに、よちよち、というのは「びに一る族」の赤ちゃんです。キョウダイの三男坊です。

「びに一る族」はびに一るで出来ていて、人間とは違います。

けれど人間としてることはまったく同じ。なので、よちよちも、人間のちいさい子とまったく一緒。

そんな、よちよちですが。

よちよちのおじさんは、けっこう大きい会社を経営しています。そのおじさんのツテで、もっと大きい会社のエライ人と、よちよちはお話する機会があったのです。

大きい会社は、宇宙開発をしている会社でした。最近、民間でも宇宙開発事業をやっています。

エライ人：「イーロン・マスク氏に負けてられないよ。我が国も、どんどん宇宙開発していかなくちゃ」

よちよち：「おいも！ おいも！ おいもそう思う！」

エライ人：「そうか、君。分かってるねえ」

よちよち：「もいもい！」

エライ人：「よし決めた。次に宇宙に発射するロケットには、君が乗ってくれないか？」

よちよち：「いいよー」

こうして、よちよちはロケットで宇宙に発射されることになったのです。

「5」「4」

カウントダウンが始まりました。

地上では、長男をはじめ、よちよちの家族や友達たちが心配な面持ちでいました。

長男：「宇宙だなんて。よちよち、大丈夫かなあ」

ロケットのエンジンは既に燃焼段階に入っていて、ロケットの中は、ざわめき音がしていました。

「3」「2」

音が大きくなっていましたが、よちよちはそんなに気になりませんでした。飛行機の中で聴く音に似ていました。

よちよち：「まいぺんら〜い」

「1」「0」「発射」

その瞬間、よちよちが口にした言葉は、偶然にも、その昔ソ連。その国は今ではロシアと呼ばれている国とだいぶ重なりますが。その国で打ち上げたロケットが初めて有人宇宙飛行を成功させた時のパイロット。ユイリィ・ガガーリンが打ち上げの瞬間に叫んだ有名な言葉と同じものでした。

よちよち：「さあ、いくじょい！（さあ、行くぞ！）」

ロケットは、なめらかに発射台を離れました。

打ち上げ、成功です。

やがて大気圏を抜けると、よちよちは宇宙の中にいました。

宇宙から見た地球は、何だか、クマさんの頭みたいだな、とよちよちは思いました。

宇宙にはたくさんの星が煌めいていました。その一つ一つ、一頭一頭がクマさんの頭だと思えば、みんな友達のような気がしてきました。

ここで、よちよちは一言残しました。

ユイリィ・ガガーリンもそうでしたが、宇宙から地球を見ると、人（よちよちは正確にはびにーる族の赤ちゃんですが）は何か名言を残したくなるものなのです。

よちよち：「ちきゅうは、クマだったーよ」

帰りは、よちよちはロケットの複雑な操作はできませんでしたが、全部エライ人たちが、帰還シーケンスを組んでおいてくれました。

ただ、大気圏をもう一度戻る時は、カタパルトの表面は 2000℃近くにもなるので、中もちょっと熱かったです。

よちよち：「ちょい、これ、あっちーお！」

やがてパラシュートが開き、よちよちを乗せたカタパルトはユーラシア大陸の真ん中辺りの砂漠に着地しました。

よちよちがカタパルトから出てくると、周囲は荒涼（こうりょう）とした砂の世界でしたが、時間としてはちょうど夕暮れ時で、地平線の向こうに太陽が沈んでゆくのが見えました。

よちよちは、宇宙で見た闇の彼方にキラキラしている星々も綺麗でしたが、地球から見る橙（だいだい）色のお日様も綺麗だと思いました。

どっどっど、という、エンジンの音が近づいてきました。

長男がトラックを運転して、砂漠の真ん中までよちよちを迎えに来てくれたのです。後ろの荷台には、次男、いもも、からあげ、ドラドン、おちおち、四角ら、びにーる族の家族や友達たちも乗っていました。

長男：「よちよち、お帰り」

よちよち：「たーいま！」

よちよちもトラックの荷台に乗せられて、家に向かって出発です。

温かいオレンジ色に照らされて、トラックに揺られるよちよちたちの影が、バラバラではありながら、でもところどころ重なり合いながら、地平線の向こうまで伸びていました。

長男：「よちよち、家に帰ったら、みんなでポンデリングを食べようか」

それは、よちよちとしても嬉しい申し出だったので、星の輝きみたいにパッと顔を明るくして。

「もいもい！」

よちよちは、こう叫んだのでした。

／「よちよち、宇宙へ行く。」・完